# 仏教の現代化と社会福祉

奈　倉　道　隆

## 一、仏教の現代化

仏教は、すべての人間を一切皆苦の人生から究竟安穏の境地に至らしめようとする道である。したがって、仏教を現代化するということは、現代の苦悩を仏教の根本思想に基づいて解決する道を開拓することでなければならない。

また仏教は、大乗仏教である限り自己一人の苦悩の解消に満足することなく、衆生と共に困難をのりこえ、共に安穏の境地（仏国土）を築こうとする社会性と積極性とをもつ必要がある。大乗仏教は、つねにその時代その地域社会に生きる教えとして発展したものであり、現代化された仏教こそ真の大乗仏教ということができる。

現代の苦悩は、すぐれて社会的である。一見、内面的な苦悩とみえても、その苦悩の背後に必ず社会がある。一方、仏教の根本思想である縁起観も、一切の事物の相依性を説いており、社会との関連を無視した認識は成立たない。

いずれにしても現代化された仏教は、現代の社会的困難ととりくんで、人間の苦悩を社会的観点から解決していこうとする積極性をもつものでなければならないといえる。

## 二、仏教と社会事業

人間の苦悩を社会的観点からとりあげ、社会的努力によって解決



していこうとするものに社会事業がある。なかでも、近代的社会福祉事業は社会科学と人道主義のうえに立つもので、歴史的には宗教（キリスト教）と深いかかわりをもつものであったが、近代においては宗教との分離が明確になされている。それは、宗教を形而上のもの、社会事業を形而下のものと限定する近代思想の立場に立つ考え方である。

しかしながら仏教は、形而上に限定できるものではない。むしろ形而上と形而下とを分断しないで統一的にとらえていくところに仏教の特色があるといえる。

一例をあげるならば、天台の摩訶止観は、修道法を説くものであるが、その中に健康法と疾病治療法とが具体的に記されている。すなわち、前方便の章には、健康の保持法が示され修道の準備として心身を調整する方法が述べられている。また、正修止観の章には、疾病の症候論（病相）、病因論（病起因縁）、治療法（治病）が述べられている。この正修止観は、修道の「行」であると同時に、歴縁対境の普段の人間生活において実践すべきものとされているから、正修止観に示された治療法は、信仰生活と一つに融合した医療のあり方を示している。

そして、正修止観の中に治療法を説く所以は、「人間が仏法に依って積極的に生きる（止観する）とき、病にかかることもあるが、病にかかったからといって止観をやめるのではなく、むしろ病を克服する努力を通じて、諸法実相を体得する止観を積極的にすすめるべきであること」を奨励するものと理解される。したがって、病気の治療が、単なる病気なおしにとどまらず、縁起の法に随順した積極的な生き方をめざして、心身の両面から生活の再編成を促すものと

なっている。

そのほか、大智度論、梵網経などには、医療だけでなく現実生活の中での生活困難に対する援助のあり方を説いている。そしてそれらは、布教の手段でもなければ、自己練磨のためだけのものでもなく、菩薩道すなわち仏道そのものが利他行を指向するものとして提示されている。

このような社会的実践は、実践者に人間存在の相依性を理解せしめると同時に、衆生にとってより人間的な生き方を保障する理想社会（仏国土）の建設を促すものとなる。それはとりもなおさず社会事業である。このような観点に立って、仏教と社会事業とが本来的に一つであり、不可分の関係にあることを明らかにしたい。

ただ、近代社会福祉事業が近代思想の上に立つのに対し、仏教の社会事業は縁起観の上に立つという相違点がある。それは、前者が社会科学に依るのに対し後者が縁起の法に依るという点、前者が人道主義を推進力とするのに対し後者が菩薩道を推進力とするという点の違いである。今後は、それぞれの特質と共通性とをふまえながら、仏教の社会事業と近代社会福祉事業との関係を明らかにしていかなければならないと考える。

## 三、浄土教の現代化と社会福祉

仏教の中で、とりわけ社会性に富む浄土教をとりあげ、現代化のための理解の試みを述べながら、浄土教と社会福祉とのかかわりについて論じたい。

浄土教は「聞法——念仏——往生」というプロセスによる仏道であり、その究極目標は、仏道一般が「涅槃」であるのに対し「往生」というきわめて行動的・社会的・大衆的なものとなっている。このことは、浄土教がすぐれて社会事業的性格をもつものとして注目される。

浄土教における「聞法」は、縁起の法を認識することであり、人間の相依性すなわち社会的性格を明らかにすることである。この認識をふまえて「念仏」という実践が展開する。念仏は云うまでもなく阿弥陀仏への帰依であるが、この阿弥陀仏は無量寿経の四十八願に示された「福祉的理想社会の実現の力」を象徴するものと理解される。したがって念仏をとなえるということは、福祉実現のための社会的活動に自己を投ずる決意を表明することとなる。また、念仏が生活全般に浸透し行動力となるということは、その人の生活そのものが社会福祉に徹することを意味する。

浄土教は廻向を行為の原則とする。廻向は、外見的には仏道一般の利他行と異らないが、それが己れの力によってではなく、弥陀の力（理想社会実現の力）によってなされると信じ、自己に執着しない活動、社会的連帯性をもった活動として展開していくところに独自性がある。

浄土教では、往・還二相の廻向を説く。往相とは、矛盾に満ちた現実社会に己れを埋没させることなく、これを否定し、理想社会に向って己れを投げ出そうと決断する行為と解釈される。また還相とは、理想を求める自己が夢想にふけることなく今一度現実の社会に立ちかえり、矛盾の中から衆生と共に福祉の実現に励もうとする実践の行為と理解される。善導の往生礼讃に示された「願はくは諸々の衆生と共に安楽国に往生せんことを」という言葉は、還相廻向を説くものであるが、それがそのまま仏教の社会事業の理念としても深い意義をもつものであると考える。